

聖書：ルカの福音書 17 章 20～21 節

説教：神の国はあなたの中にある

1 失われた故郷

皆さんは、ふだん「神の国」のことを意識しているでしょうか。救いの約束をいただいた者は「神の国」に招かれていることは知っています。でも、神の国のことを詳しく知っているわけではありません。神の国と言われてもぴんと来ない。それが多くの方の実感ではないでしょうか。

信仰が弱いということではありません。実は、皆さんはいつも考えているのです。私の例を挙げます。昨年11月に母が入院したというので岩手に帰りました。母はそれまでひとり暮らしをしていましたので、家に行ってみると当然ですがだれもいません。あちらこちら雑草が生え、家の前には野菜が収穫されないままにありました。私が子どもの頃は多いときで8人が暮らしていた家でした。それが今、朽ち果てる一歩手前です。大切な故郷が失われてしまった、という悲しみが胸に迫ってきました。でもそんなことはまだ小さいほうかもしれません。いま、福島では故郷を追われ、もっと深刻な問題に直面している人たちが沢山いることを知っています。

失われたという感覚は、家や土地だけのことではありません。私たちはいろいろなものを失って苦しんでいます。たとえば健康を失うことがあります。愛する家族を失うこともあります。人を赦すことができず、苦しむこともあります。悪いとわかっていても、何度も同じ罪を繰り返してしまう自分を憎みま

す。自分は、もっと良い人間であったはずで。けれどもいつからか、まっすぐに進めなくなってしまいました。なにも思い煩うことのない、純真な日々に戻ることができたならどんなにかすばらしいだろうか。深いところで悲しんでいます。まさに私たちはエデンの園から追放されたアダムとエバだということです。失ってしまった私たちの本当の故郷。それが神の国ということです。

しかし、一方で「神の国」を政治的な理想の国家としてとらえる人たちもいました。日本では、ある政治家が「日本は神の国である」と発言して問題になったことがありました。実は、二千年前のイスラエルも同じでした。ここはイスラエルという神の国であるはずなのに、ローマ帝国の支配され、神の国は失われてしまった。もう一度神の国を取り戻さなければならぬ。パリサイ人だけではなく、多くの人たちがそのように願っていました。そこへイエスが登場したのです。もしかしてこの人が、もう一度神の国を取り戻してくれるのではないか。そんな期待がパリサイ人たちの、「神の国はいつ来るのか」という質問に込められています。

2 あなたがたのただ中にある

1) 目に見えるものではない

これに対してイエスの答えはこうでした。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。」

神の国を築くためには、まずローマ軍を追

い出し、そしてもう一度聖書に立ち返り、自分たちの手で国を治めていく。神の国はそうにして再建されると信じて伺っていません。ところがイエスは、神の国とは目に見えるものではないと言われます。ローマ軍が出て行くこととはまったく関係がない。

2) 「ただなか」と「内側」(マタイ 23 章 26 節)

では神の国とはどのようなものであるのか。イエスは言われます。「いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」

まったく予想もしていなかった答えでした。いったい「ただ中」とはどこのことか。そのことを正しく理解する必要があります。そんなときは、これと同じことばが使われている聖書の箇所を調べてみると大きな助けになります。マタイの福音書 23 章 25, 26 節に同じことばが使われています。「わざわざ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側をきよめるが、その中は強奪と放縦で一杯です。目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。」

「杯の内側をきよめなさい」の「内側」が「ただ中」と同じことばです。パリサイ人たちは、目に見える外側のことには大きな注意を払います。紫色の美しい高価な服をまとい、身のこなしは重々しく、ことばも祈りも滑らかで、それを見たり聞いたりした人たちは「ありがたい、ありがたい」と言って手を合わせて感謝するかもしれない。けれども、どうだろうか。杯でも皿でも、当たり前のことですが、外側があれば内側もある。外側は立派かもしれないが、あなたがたの内側のどうなっていますか。もしかして、汚い思いで一

杯なのではありませんか。イエスはそんなふうに問いかけました。

「あなたがたのただ中」とは、「あなたがたの心の内側」のことであるとわかります。あなたがたの心の内にすでに神の国は来ているのだと語っています。しかしどうでしょうか。皆さんは実感がありますか。私たちは、救われてやがて神の国に招かれることは信じています。けれども、それはやがていつかというようなかなり遠い未来のことと思っています。すでに神の国が自分の心の中にあるなんて、おそらく実感がわからないのではないのでしょうか。

あるいは、自分のところには来ていないのでは、と不安を覚える方もいるでしょう。「神の国は聖いところですよ。こんな汚れた私の心の中にそのような聖いものは入れるはずはない。だから私の中に神の国はないと思います。」

またある方は言うかもしれません。「私の所にも神の国が来て欲しい。でもどうすれば神の国は来るのですか。」いったい、どのような者のところへ神の国は来るのか。次にそのことを見ていきます。

3 神の国の王であるイエス

1) 役に立たないしもべ

先週、11 節から 19 節を取り上げました。十人のツアラアトに冒された人たちが「イエスさま。どうぞあわれんでください」と叫び、イエスがこの人たちをいやされた場面です。今日の箇所は、前回のところと内容がまったく違い、何の関係もないように見えるかもしれませんが、でもよく見ると、テーマはつながっています。

ツアラアトに冒された人たちは、汚れた者

であるとの烙印を押され社会から隔離され、差別されていました。健康な人のそばに近づくことは禁じられていましたから、イエスが来られても遠く離れたところから叫ぶしかありません。その彼らがいやされました。救われました。今日のテーマで言えば、この十人の心の内にも神の国が来たことになりま

す。彼らは聖い人たちでしたか。いいえ。彼らは、見た目にも皮膚がただれ、膿だらけで、社会的にも汚れた者であると見られ、また宗教的にも罪ある者とされた人たちです。どこにも聖いところがない。そんな人たちが救われました。きっかけはただ一つです。「イエスさま。どうぞあわれんでください」と叫んだから。自分は汚くて、社会の役立たずで、みっともなく、恥さらしで、人に顔向けできない、どうしようもないみじめな人間です。もう、あなたにあわれんでいただくしかない者です。そのように叫んだとき、救われました。最初からきれいな者、聖い者が救われたわけではありません。

というこは、どうなりますか。「私は汚い人間です」と思っている方こそ、神さまの救いに最も近い。神の国はそんな人のところへ真っ先に来ている。そういうことになります。

2) 追い出される王

まさかと思うでしょうか。その、まさかということをしてくださった方がイエスです。どのようにしてでしょうか。犠牲を払ってです。あの十人のツアラアトに冒された人たちのことでは、イエスはこの十人を救うために彼らの汚れと罪を引き受けてくださいました。

今やイスラエルの王となるのではないか。

政治的なリーダーとなるのではないか。イスラエルに目に見えるものとしての神の国を打ち立ててくださるのではないか。人々から大きな期待を寄せられていたイエスが、罪ある者となられます。人々に神の国の到来を知らせてくださった方が、皮肉なことにご自分がつくられたこの地上の世界から追い出されてしまいます。おまえは結局役立たずであつたとののしられ、あざけられ、殺されていきます。人間にとってこれ以上のないみじめな姿になられ、貧しい姿となられます。

3) 神の国はすでに来ている

人々は頭から信じ切っていました。神の国は目で見えるものである。ところがどうですか。目の前に神の国の王様がおられたのです。でもそのことに気がついた者はほとんどいませんでした。あのツアラアトに冒された十人でさえ、気がついていません。でも、それでよかったのです。イエスは、「わたしは神の国の王様である」とは、絶対に言われません。その代わりこう言われるのです。「わたしは役に立たないしもべです。」そんな方ですから、目の前にいる方が神の国の王様であると気がつかなかったとしても無理ありません。イエスは目立たないようにとご自分を低くされます。

でも、この方が与えてくださった神の国はちがいます。私たちの中に大きな変化をもたらしていきます。そんな実感はないと言うかもしれません。神の国を実感するために、もっと信仰深くならなければと考えるのでしょうか。いいえ。聖書に何と書いていますか。「神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」今すでに「ある」。

これは恵みのことばです。なぜなら、信じ

られないと思っても全然問題がない。実感がなくても問題がない。あなたがどう思おうが、それとは関係なしで、「ある」と言っているからです。

主は、「貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものだから。」(ルカ 6 章 20 節)と言われました。私たちは故郷を失いました。本当の自分、罪がなかった自分を失いました。あらゆるものを失った私たちは貧しい者になってしまいました。その貧しい者に、失ったもの以上のすばらしい神の国を分け与えてくださる主の恵みを覚えます。